

double-edge



溜冠

double-edge

言葉という詩（うた）は
時に写真よりも場面を切り取る
それはもう恐ろしいほどに
それはもう 時に激しく
心を傷つけるほどに
心を奥底から安らぎへと導くほどに
この両面性

言葉はそれだけ諸刃（もろは）の剣
そしてそれが持つ響きもまた
人を狂わす事もあり
人を蘇らせることもできる

それだけ言葉や音楽は
人の心に食い込む物質
使い方によって怖いものにもなり
最高の結果を生み出す糧ともなる

どう使う 使い手になるか
それによって
善にも悪にもなる

戦い方を間違えれば
どちらにもなりうる

それを知って なお
言葉を扱い続ける理由は
逃げられない戦いがあることを
知ってしまったから
ここから逃げる事は許されない

ならば
この場所に留まり
受け止める
攻撃こそが最大の防御だという
言葉響かせ

静かに剣を抜く

いつも光と影の戦いだというのなら
光となって言葉という剣を

“あなたは私にとって必要不可欠な存在だけど
あなたにとって私はいてもいなくても同じ存在”
そんな悲しい言葉 言わないで

それを受け入れようとしている君が
痛々しくてけなげだから
何かしないではられないんだよ

たとえ余計な真似だと言われても
それでも
君を必要としている人がいるんだよ
君との絆を必要不可欠としている人がいるんだよ

もし 君が蔑（ないがし）ろにし
いてもいなくてもいいという
失礼な心という言葉なき暴言を
ぶつけたとしても

君をそうやって侮辱同然の扱いをした
その人以外 全ての人が
君を必要としているから

今はただ その現実を飲み込む事も怖く
同時に 覚悟を決めている頃だろうけれど
君が消えてしまえば
孤独に狂う者がある

たとえ自分の心に
優しさや希望が染みこまない気がして
毎日どこか空虚でも
頭だけの理解でもいい
僕は悲しいんだよ

もし君が……なんて考えるだけで
僕は

どんなに自分のことが嫌いで
どんなに自分の事が不甲斐なくて
許せなくても
いてくれるだけで生きられるって
そう言ってくれる人が 声が
いる事 ある事

どうか届いて

Break to pieces

今は誰ひとり
立ち入らないこの場所に
一枚の砕け散った鏡がある

まだ破片が辺りに残るけど
思いきってその近くに踏み出すと
靴の下で静かに砕ける音がした

君の心の音がした

自分の座っていた椅子を
この鏡に投げつけた君は
今 抜け殻となって
どうやって生きているのだろう

今聞きたい
君も同じように
傷ついたりしたのだろうか
それともまるで
何事もなかったかのように
日常を送るのだろうか

正常じゃないことが確かなら
理由が涙か孤独かなんて
そんな物は関係がない

自分の心はおろか
人の心なんて知る由もないけど
泣いて暮らせばいい

君がその手でつかんだ結論が
悲しみに狂うことだったのなら
その選択を誰も退ける事ができないのなら
見届けるしかない

激昂によって割れた鏡は痛々しく
きらきら月光に照らされていた
数千年前のその出来事を追憶するように

でも 今じゃそれは
墓碑を指でなぞる事と
同じくらいに虚しいこと

無音の中で絶唱するように
堰を切って泣く君の
ひざを折る後ろ姿は
誰の心にも刻まれる事なく
歴史の一ページを静かにめくった

experience

生き慣れた世界は
こんなものだと決めつけて
いつしかそれが普通になり
楽になっていた

でも何か物足りなくて
いつも胸の奥 今思えば疼いていたんだ
住み慣れた世界が壊れた瞬間
ふと思った
これも悪くないかもしれないと

新しい世界に踏み出すことは
やっぱり怖いものだけど
これにも必ず意味がある

誰にでも進むべき道があって
偶然のような必然の中で
今を進んでいる

それなら
理不尽にいくら思っても
やっぱりそれは
紛れもなく新しい景色見つめている

うまくいかない壁が立ちただかっても
それも本当は自分の道の
軌道修正をしてくれている出来事かもしれない

だって 乗り越えられない壁は
目の前には来ないはずでしょう？

乗り越えられる自分になって初めて
壁は目の前に現れる
そんな風に
どうやらできているらしい

完璧を求めれば求めるほど
理想が遠ざかっていくような気がするのなら
それは進むべき道じゃないのかもしれないと
疑ってみるのもいい

ほら こういう時に言うんだよ
「負けるが勝ち」ってね

自分の勝つとか幸せとか
知らずのうちに
他人基準にすり替わってないかい？

自分だけが知る自分自身の幸せは
他人の声なんかじゃ決まらないからさあ

自分一個の存在さえ
忘れ去ってしまえるほど
強く思える何かがある事は
こんなにも幸せなこと
その喜び分かち合いたい

たとえそれが
どんなに難しい事だったとしても
僕はそれを叶えてみたい

それが大切な人の夢なら
僕は何をしてでも叶えてみせる

周りすべてがバカだと笑うだろうけど
思う存分そこで笑っていればいい
その間に僕は手の届かない所まで
羽ばたくから

そう 笑いたいなら笑えばいい
確かめるにはまだ早い時間
未来なんて分からないと
歩き続ける事やめるには
あまりにももったいない

この一秒が重なって
永遠というものを創りだしているのなら
この瞬間が確かに輝く未来
約束してる

それはきっと
思い描いた希望よりも
素晴らしい

すべてを賭けても
悔いのないものが

今ここにある奇跡に
遅すぎる事なんてなくて

流した涙は必ず実を結び
大切な人を守る力へと

笑顔でいて欲しい
それ以外に何がいるというの？

体動かすのはその思いだけ
そのためならどんな困難にも耐えられる
どれだけだって涙流せる

どんな痛みにだって負けない
この心 たとえ切り裂かれても
息絶えやしない

そう 絶対に

あの日誓った願いは
日に日に強く輝いていくもの

revolution

涙の味を少し
知りすぎてしまったのかもしれない

おかげで変哲のない
平坦な道じゃ満足できない

悲しみをくぐりぬけない品物なんて
ただの抜け殻

ほら 手の上握り締めれば
砂になるほど細かく砕ける

こんなにも綺麗に

苦しみを避ける事が
美德とされるこの世の中
一体何が得られたというの？

いたずらに痛みを追い求めるのは
もちろん間違い

だけど 誰かのために背負う苦しみ
それこそが失いかけてた
生きる意味なんてこともあるんだよ

それを矛盾だと吐き捨てる言葉も
その心の中では
進む方向が分からなくて
泣いている

見えない涙は
もう十分見飽きるほど
見つめてきたから

今度は見えない強さという名の勇気を
心の雫として伝うようにしていくべきだろう

悲しみの涙を せめて
喜びの涙へと変革させるために

僕は今日も

傷ついた君を思い 泣く

黄金

妬みという摩擦を
激しく受ければ受けるほど
黄金は輝きを増し
太陽さえ照らしはじめた

この行く手にある孤独を
怖がらせる事のないよう
はじめは小さな光を向ける

その光に慣れた頃
初めて本来の輝きで見守りはじめる

だって いくら「光」と言っても
受け入れられなきゃ
その意味なんてないから

この眼に眩く感じるすべてのものは
どこか他の人の世界のためなんかじゃなく
君の住む世界のために
本当は存在するもの

透明なんじゃないかとさえ思う
暮らしの中のこの体
暗闇が自分には似合ってると思ってた

でも そんな光輝く物も
その分 ふさわしいと知った
だって光と闇はまるでコインの裏表

ふさわしくない世界なんて
君にはないんだよ

自分の世界はどこだとかいう
固定観念に縛られずに
一つの結び目だけ
諦め混じりにほどいてみれば
実に簡単 あっという間に
すべての結び目もほどけ落ちた

無駄に難しく
考えてただけなのかもしれない

希望だとか 夢だとか
他人の手のものだと思いがち

でもいくつになっても
しがらみがあっても
手さえ伸ばせば
それはすぐに
君の世界の太陽に

導入するのは簡単みたい

ためしにお一ついかがですか

仮面

こう見えても
結構ギリギリで生きていたりして
息の仕方まで
下手すりゃ忘れそうになる

地上にいるはずなのに
未だに水の中にいるような
息苦しさを覚えているのは
時代のせい？

こんなに生きにくいのに
生きていかなきゃならないのは
なぜなのと聞きたくなる

けどその訳を本当は
そう疑問する何より誰より自分自身が
一番その答えを理解している事を知っていた

その答えを知っていることが
時折とても悲しくなるのは
これは甘えだと 弱さだと
その答えの先も知っていたから

その時自分には逃げ道がないことに
気付いたんだ
逃げ道がなくなれば人は強くなる

強くなるためには
逃げ道を断つしかない事があること
どこか他の物語の話だと思いながら
いつの日か聞いていたけど
これはまぎれもなく
僕の物語の中での話だった

受け入れる強さだけが
今この体を支えてる

うまく泳げる技術なんかいない
ただ すぐに盗まれてしまいそうな
自分自身というものが盗られない様
自分でありたい

すぐ顔に張り付きそうな仮面を
日々取り外すことだけを忘れずにいたい
たとえその振り捨てた仮面が
山のように重なり部屋いっぱいになっても

色んな顔した自分に一番戸惑うのは
誰かなんかよりこの心だったりするけど

仮面に狙われてばかりのこの顔だけは
いつの日も変わらないまま
真実に目を向ける

涙（未公開詩）

今まで存在し続けた末の
涙の数は
四海の水より多いらしい

そう言われてもいまいち
ピンとこない君にだって
枕を濡らす夜はあるだろう？

それともあなたは
心のどこかでその多さを
分かり感じているかもしれない

これは頭で考えても
答えが出る事のないもの

だけどね 君の悲しみを
分かって信じてくれる人は
この世界の中に
存在している事を
忘れないで

これは夢や幻なんかじゃなく
まぎれもない現実

悲しい現実だけじゃなく
希望を持てる現実も存在している

残酷な事が多い現実というものだけど
決してそれだけなんかじゃない

夢見る回数より
幻滅する回数の方が
増えてくるのが常だけど
本当はそう思い込んでいるだけで
実は違うのかもしれない

色んな厳しさを知っていながら
夢を見たり
希望を持ったりしている人だって
たくさんいるんだ

要はそれを
自分自身が信じられるかどうか

そんな人どこにいるのさと
遠ざけてしまえばそれで終わりだし
そういう人もいるものなのかと
受け入れられたら自然に
その一員に仲間入り

大して難しい事じゃない
けどこれほど難しい事もない

その一步を 自分の中に持っているから
そんなものだから

君の肌から涙が伝って 大地に還る
そんな日もあるって事
知らないでこんな事
言っている訳なんかじゃない

ただその声なき声は
聞こえてない訳じゃなく
聞こえてるんだって事
伝えたかっただけ

雨音

傘をささずに今はただ
降りしきる雨に打たれていたい

この雨の下なら
どんなに泣いていても
気付かれることはないだろうから

この音のもとなら
どんなに声を上げても
聞かれずに済むだろうから

そう この悲しみをいちばん見せるべき
愛する君にだけには
本当は見られなくなかった……

拭えるはずもないほど
次から次へと溢れる涙
君がその手でそっと拭った瞬間
涙は止まらないままのはずなのに
心に光差したの

雨がまだ降りしきるけど
たとえ永遠に雨が止むことがなくても
生きていけると思った

それは陽だまりも
負けてしまうぐらいの優しさに触れたから
その瞬間 決めた
この涙 一生君に捧ぐと

これぐらいしか僕は持っていないから
精一杯の気持ちを
この手で差しだしたんだ

その時見せた君のひとひらの涙

ひらり とても綺麗で
僕まで泣きそうになる

君は僕の為に泣いてくれたというの？
頷く君のこの手握る手 とても強くて
気が遠くなりそうだった

まだ止まない雨 立ちすくむ二人
僕の涙を君が浴びてくれているのなら
君の涙に僕は濡れよう

誰かのために涙することを
心から知った気がした冬の夜
空はただ僕らの味方でしかなかった
もう どんな痛みや苦しみも悲しみも
怖くはないの

心の弦（いと）

その心の弦をつまびけるのは一体なんだろう

君の心奏でその音を聞かせて
その為の言葉をいつもまく選びたくて
今日もその言葉探しのために生きてる僕

言葉を選び取り
手にとっては
その心の弦を
いちばん綺麗に鳴らせるかどうか
試してみるんだ

痛みが生まれないように
そっと触れさせてみては
音色をうかがってる

うまく鳴れば
その音に天にも昇る気持ちで
それが忘れられなくて
きっと僕は今日も言葉選びを
楽しんでいるんだろう

ねえ また綺麗に泣いてよ
その涙が僕の心を鳴らすいちばんのもの

でも それ以上に
その微笑みがいちばん僕のかき鳴らす

君の笑顔も涙も
何もかもすべてが次から次へと
この心の演奏を止めてくれない
この音楽は君だけにしか聞こえない
宇宙でたった一つの宝物

僕の心の奏でごと君にあげるよ

そしてずっと

僕にしか聞こえない君の心の演奏を

聴きながら生きていきたい

もう この音だけしか聴けそうにないんだ

君が生きているということ

それは僕にとって

どんな名曲も敵わない大交響楽

これからも 君のその命の鼓動以外

とても聴けそうにないんだ

善悪

何が善で何が悪かなんて
難しい問題だけど
はっきりとしたその区別が
少なくとも一つはある

誰かを手にかけることだけは
何があっても認められないもの

分からないからって
その分別から逃げているようじゃ
あの手に誑かされてしまう

人知れず心を暗闇に墮としてばかりじゃ
悲鳴さえも上げられない

その隠れた闇を見抜けるのは
明日を求める眼差し

希望を諦めるような声は
いくら正論に聞こえても
ごまかしきれない

いずれあの道は
後悔の涙だけが降りしきる

気付かれないように近づく
足音の正体は君自身

手を伸ばす先には
鏡の中に映る君

自分に自分自身を手につけさせるような
命令ばかりの残酷を続けてばかり
引きずるものはその足だけで
もう充分だから

砕けた邪な欲望は何も残さないまま
空を流れていく
自覚さえない罪は
苦しみを生まないのだろうか

他のものがいくら症状を伝えてきても
これだけは深ければ深くあるほど
自覚症状を生まないまま沈黙し続けること
覚えもないほど昔に知ってた気がする

決着というものがあるとするなら
それはいつの日か迎えなきゃならない

厳しい一瞬
その日僕は 何を思うのだろうか